

## 渥美半島の太平洋岸にある岩礁

松岡 敬二・藤城 信幸・渡辺 幸久

### はじめに

渥美半島の西端の伊良湖岬から静岡県との県境付近までの太平洋沿岸は、「表浜」と呼ばれ、海浜堆積物からなる砂浜海岸が連続している。砂浜海岸の陸側は海食崖となっており、海拔約70mある半島東部から伊良湖岬に向かい徐々に高度を下げ、小塩津海岸では約10mとなっている。中粒砂を主体とする砂浜海岸は、高松一色海岸及びそれ以西の若戸海岸、和地海岸、日出海岸、伊良湖岬において断続的に岩礁が出現している。これら岩礁地帯は、渥美半島の山々を作っている秩父帯のチャート、珪質泥岩・砂岩や三波川帯の片岩類を覆っている第四紀の堆積物が侵食され、対置海岸となっている（辻村, 1929; 酒井, 1956）。対置海岸の沿岸域には巨岩・巨礫が密集し、沖合に向かって岩礁が点在している。また、潮の干満にかかわらず、海上に露出しない暗礁も多く存在する。

岩礁地帯は海藻や魚貝類が豊富であり、格好の漁場となってきたが、漁船を座礁させたり、漁網を破ったりするために注意すべき存在であった。そのため、操業に支障となった岩礁の中には、漁師によって爆破されたものもある。地元漁師にとって、漁場となる岩礁に名前を付け、位置関係を把握し漁師間で情報を共有することは、操業の安全と漁獲量の確保のために極めて重要であった。

明治30年頃から表浜の臨海村は、海だけでなく養蚕の普及により、陸への依存度も増していった（栗原, 1955）。それでもシラス漁や地引き網漁などが盛んに行われていた昭和20年代前半までは、半農半漁の表浜の各集落は海との関わりも強かった。1949年の農林省の事業として着手された豊川用水が、1968年に完成した（中島, 2008）。これにより、通水以前から全国的な知名度があった電照菊のほかに、施設園芸、野菜栽培に畜産が加わり主農副漁へと転換していった（藤田, 1993）。各集落の漁業の比重が激減するにつれ、代々伝承されてきた岩礁の名前と由来を知る者は減少し、現在ではわずかに80歳を超える古老や一部の漁師に限られるようになった。

高松一色海岸以西の岩礁の名称と位置について、これまでの文献と対比しながら整理し記録することは、地形の変遷や地域文化の資料としても重要と考えた。そこで、2015年から地元の古老や漁師経験者からの聞き取り調査と現地調査を開始した。

本論文では、岩礁の記録のある江戸時代の古地図、杉山(1747)、粕谷(1953)、石川(1967)、粕谷(1990a, b; 1991; 1992)、伊藤(2003)などに対比しながら、岩礁の分布地図を作成し、主な岩礁名の由来について整理した。

### 海岸の岩礁

渥美半島の伊良湖岬から高松一色海岸まで

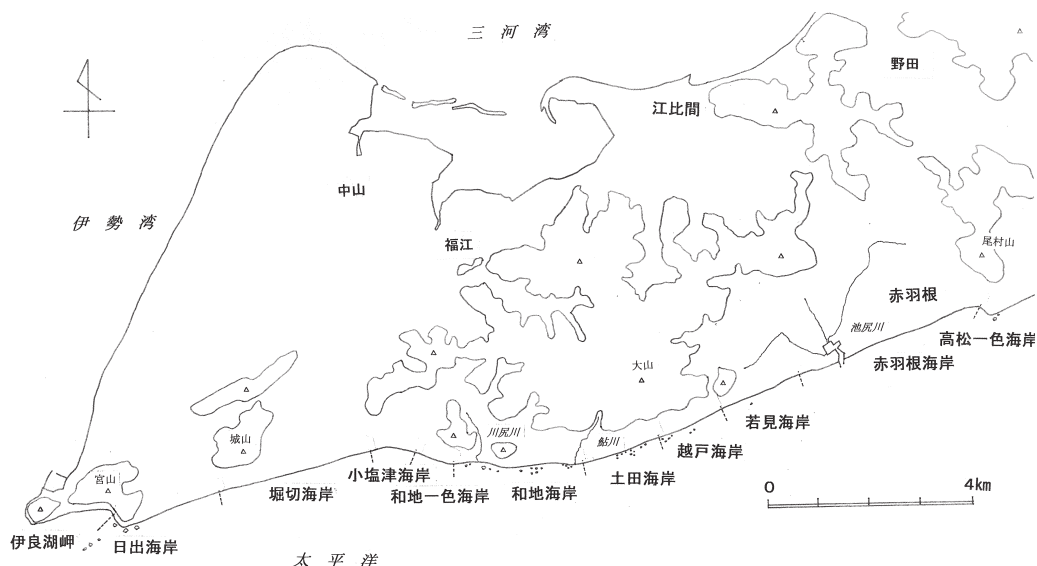


図1 渥美半島の海岸位置図

の太平洋岸を、11の海岸に区分した(図1)。岩礁の発達する8海岸は、田原市発行の2,500分の1の地形図を基に10のブロックに分けて岩礁分布図を作成し、岩礁名を記入した。

#### (1) 伊良湖岬

伊良湖岬周辺は、三波川変成コンプレックス(御荷鉾ユニット)からなる岩礁地帯となっている。伊良湖港から伊良湖岬を廻る遊歩道の陸側は、珪質片岩や苦鉄質片岩・変成玄武岩溶岩が露出する。海側は他の地域から運ばれた石材により護岸され、自然の海岸線は南側に残るだけである。

伊良湖岬の南東から続く砂浜が恋路ヶ浜で、北側に緩く弧を描きながら日出町骨山の断崖西端まで続いている。恋路ヶ浜の東端は、神島-伊良湖断層が推定されており、三波川帯と秩父帯の境界となっている(中島ほか, 2010)。

懷玉三河州地理図監(巖嶺編, 1741)、参河國(市川, 1837)、改正三河国全圖(岡田編, 1837)には、伊良湖岬南側に岩礁が描かれているが、岩礁名は付されていない。粕谷(1953)の「伊良湖崎略図」は、伊良湖岬周辺及び、

骨山周辺(日出海岸)に関する最初にまとまった岩礁地図である。『伊良湖誌』(伊良湖自治会, 2006)では、粕谷の「伊良湖崎略図」を彩色した地図(糟谷勝美個人蔵)が添付されている。地理調査所(1947)発行の2万5千分の1地形図「伊良湖岬」の「三ッ磯」は、粕谷(1953)では「三ッじま」となっている。国土地理院(1997)発行の5万分の1地形図「伊良湖岬」には、三ッ磯と石門が記入されている。粕谷(1992)は伊良湖港、伊良湖岬周辺、骨山周辺に点在する岩礁について①甚左右衛門島、②キス島、③渡り島、④牛島、⑤カゴ島、⑥萩島、⑦小丸島、⑧クラ骨島、⑨白木島、⑩大島、⑪大高セ島、⑫三ッ岩島、⑬お菊島、⑭オサエ、⑮トエン坊島、a、地藏島、b、長磯、c、八兵衛島、d、彦太郎、e、長島、f、大ア草島、g、佐久見島、h、マゼ島、i、玉下島、j、大黒島を地図中に記している。

伊良湖岬周辺の岩礁名については、粕谷(1953)、粕谷(1992)、伊藤(2003)の岩礁名を対比し(表1)、糟谷研三と粕谷政行の両氏と共に現地調査し、岩礁分布地図としてまとめた(図2)。

粕谷(1953)の「きすじま」、粕谷(1992)

表1 伊良湖岬周辺の岩礁名の対比

粕谷 (1953)	粕谷 (1992)	伊藤 (2003)	本論文
かごじま	カゴ島	カモメ島 (カゴ島)	カゴジマ
あい穴	————	アイナメ	アイアナ
大じま	大島	マサキ (弁天の大島)	マサキオオイワ
おきく	お菊島	お菊	オキク
ひら	————	平島	ヒラジマ
おさえ	オサエ島	オサエ	オサエ
かわうそ	————	カワウソ	カワウソ
二つ	ニッ岩島	————	フタツイソ
大こく	大黒島	大黒	ダイコク
とうえんぼ	トエン坊島	トエンボ	トエンボ
べた	————	アソ (陸地の地名)	ベタ
ひこはち	————	————	ヒコハチ
たろえ	————	タロエ	タロエ
さくみ	佐久見島	佐久見	サクミ

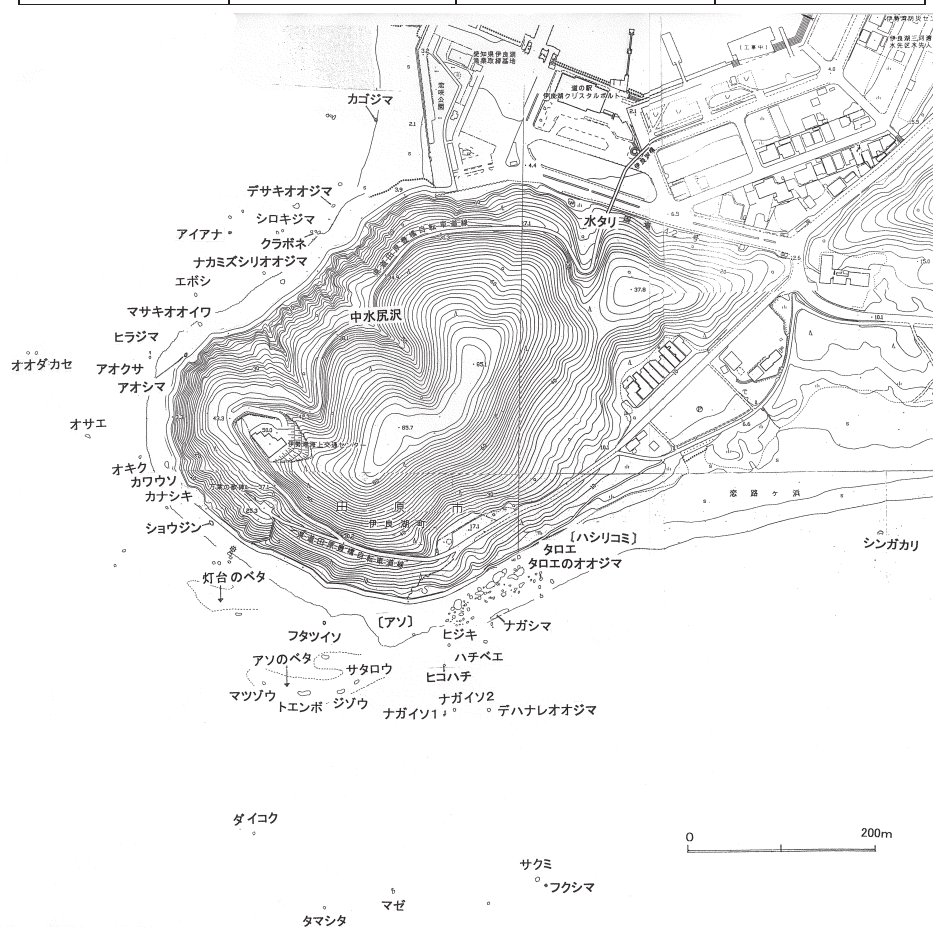


図2 伊良湖岬周辺の岩礁分布



写真1 シラキジマ



写真2 オサエ



写真3 a. カワウソ, b. オキク



写真4 アソのベタ

の「甚左右衛門島」、「渡り島」、「牛島」は昭和36年度から始まった伊良湖港湾整備により消失した。アイアナ（あい穴）は、スズキ目のアイゴ（地元名アイ）の棲む茶釜状の穴である（粕谷, 1953）。二つの長島は西側をナガイソ1、東側をナガイソ2に、岸近くの長礁をナガシマに訂正した。伊良湖周遊道は、伊良湖港海岸侵食対策事業（1988-1997）として敷設され、海側が外来巨岩の護岸となった。岩の上側が白色のシラキジマ（白木島）は、外来巨岩の沖にある（写真1）。クラボネ（クラ骨島）は魚が多く集まる場所で、特にタイ釣りのポイントであった。松蔵（人名）しか潜れなかった岩礁には、マツゾウ（松蔵）の名前が付いた。オオダカセ（大高セ）は渡りどころの瀬を意味し、ワカメを二本つないでその岩に巻いた。マサキオオイワは、周遊道路脇にあり、平らな岩の上面から大物を釣るポイントとなっていた。ナカミズシリオオジマ（中水尻大島）は、伊良湖岬北西面にある中水尻沢の沖合にある。エボシの東南にはアサギ石がある。アサギ石に似た石は、亀山町石塔山西側の藤原大山と伊良湖神社にある。岩の色が浅黄色であるのでこの名前がある。アオサギは、粕谷（1953）の「青くさ」で、エボシとヒラシマの間にある。この岩だけに長さ10～15cmの“ジャヒゲ”に似た青緑色の海藻がびっしりと生える場所があった。オサエは干潮の時に三角波が立ち、櫓で押さえておくのに使われた岩礁であり、オサエの名前となった（写真2）。カワウソ（川瀬）は、岩場でみかけたニホンカワウソに由来する。江戸時代のカワウソの分布図（1730年代）には、尾張・遠州には文献上の記録はあるが、

三河にはない（安田, 1987）。しかし、伊良湖の東方の田原市高松町一色の磯浜では、昭和30年代までニホンカワウソの目撃例がある（高松町谷倉の石川正博氏私信）。オキクは、「お菊島の伝説」（粕谷, 1990b）からきた名前である（写真3）。フタツイソは粕谷（1953）の「二つ」にあたり、日間賀島・菅島の漁師は兎の耳のように海面上につきでている形から「ウサギ」と呼んでいた。ベタ（平たい板状の岩）は、三波川帯と秩父帯の境界である神島-伊良湖断層の走行方向に伸びている。粕谷（1953）では海底に平らな岩盤がある場所が「ベタ」で、陸地の「アソ」（伊藤, 2003）の延長上にあるので「アソのベタ」と呼ばれている（写真4）。その沖の岩礁の大きなものには、陸側からサタロウ（佐太郎）、ジゾウ（地藏）、トエンボがある。その沖には、ダイコク（大黒）、タマシタ（弾下、玉下）、マゼ（南風）がある。

## (2) 日出海岸

ビューホテルのある骨山の断崖周辺（日出海岸）は、秩父帯のチャート、珪質砂岩、チャート角礫岩からなる。チャート層は褶曲や層間褶曲（デコルマ）、断層も観察できる。第四紀層が侵食され基盤岩の露出する対置海岸となっている。石門（陸の石門）を作るチャート層の表面には、基盤にアバットした砂岩が付着しており、「つぎたし状不整合」と表現されている（酒井・林, 1956）。

1834（天保5）年以降作成とされた大垣新田藩領巡検絵図には、日出村に石門、堀切村に白石が描かれている。小田切編（1877）の尾三両国図には、伊良湖崎の北側に三ツ石が

描かれている。三河国全図（齋藤・小田切、1879）には、日出海岸沖に10の岩礁が点在しており、その西には石門、アシカ岩、三ッ岩

の名前がある。参謀本部陸軍部測量局が1887年に発行した20万分の1「豊橋」には三ッ岩がある。尾参實測圖（太田ほか、1889）は、

表2 日出海岸の岩礁名の対比

粕谷 (1953)	伊藤 (2003)	本論文
三つじま	三ッ島	ミツジマ
まんご	————	マンゴ
おとがめ	オトガメ	オトガメ
あしかじま	アシカ島（沖の磯）	アシカジマ
こめかみ	————	コメカミ
なわばり	ナワバリ	ナワバリ(ナハリ)
とくしま	————	トクジマ
牛の首	ウシノクビ	ウシノクビ
赤がめ	アカガメ	アカガメ
天ぐ岩	テングイワ	テングイワ
石門	岸の石門	オカノセキモン
大じま（沖の石門）	大島	オオジマ
立岩	立岩	タテイワ（ゼニイワ）
うらば	ウラバ	ウラバ
だかせ	————	ダカセ
ねぼそ	ネボソ	ネボソ
ぐさ	グサ	グサ

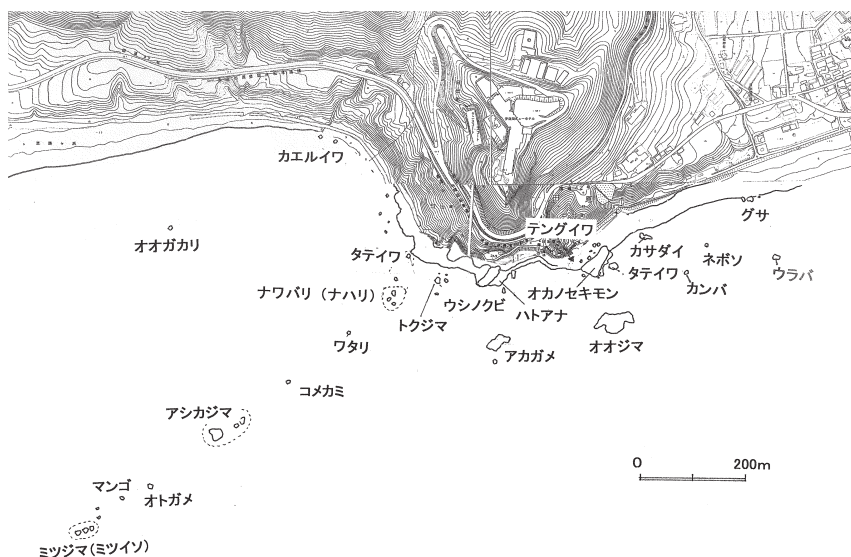


図3 日出海岸の岩礁分布



ドイツ式「ケバ図」の図法により石門、アカガメ、アシカ島、トオカメ、三ッ岩、やや北西側にサクミが表記されている。愛知県参河全図（愛知県，1908）の2万分の1では、骨山沖に8島が記入されている。骨山沖のほぼ東西に並ぶ3島が三ッ岩とある。愛知県編（1914）には、第六項島嶼において礁名が町村ごとに表にまとめられている。渥美郡伊良湖岬村（伊良湖村、堀切村、和地村が合併した明治39年～昭和30年の自治体）では、アジカ島、三ッ岩、トラカメ、佐久見島、黒石、赤磯、大岩、大磯、タワ、長床、立岩、伏見、ウメイ、ショボシ、ヲヤ舟岩、ツリ岩、石赤岩、カハコ、チョボ、ヒシャゴがある。その他、島としては伊良湖岬村の石門とアカガメがある。10万分の1の地図の渥美半島全圖（郷土地理研究会，1927）には、「伊良湖岬村日出海岸には中央が侵食されて屹立する巨岩を日出の石門と称する」とある。石井（1927）の7万5千分の1の地質図「伊良湖岬」には、三ッ石がある。

図3は、斉藤信夫氏からの聞き取りと齋藤勇治氏との現地調査により、粕谷（1953）、伊藤（2003）の岩礁名と対比し（表2）、岩礁分布図としてまとめたものである。

土井周防守が鳥羽藩の藩主であった1681～1690年間の作図とされる日出村海岸墨引絵図には、日出の石門にあたる岩礁から西側に三番目の岩礁が「縄張石」とある（渥美郷土資料館編，1988）。その説明には「是ヨリ日出村堀切村濱境迄拾八丁式拾間」とあり、伊良湖村と日出村との村境となっていた。ナワバ

リ（縄張）の陸側にはトクジマがあり（写真5）、そこから北側の磯は「脇の磯」の名前で呼ばれていた（粕谷，1992；伊藤，2003）。アシカジマ（海驢島）は、柳田（1902）の『游海島記』に「昔は海驢という獣の、群を為して来り遊びしが、凝りて今は来ずなり」とある。粕谷（1990b）は、古くから伊良湖に伝わる昔話『與八という翁の物語』第二話 海獣「トド」のなかで「昔、岬の海に連なる島々（アシカ島・三ッ島等）に数知れぬ程の海獣トドが棲み付いていたという。里の人々は、これをアシカと呼んでいた」と記録している。ミツジマ（三ッ島）は、岩礁が三つ並んでいる。ミツジマの東南東には暗礁「イカリガケ」がある（斉藤信夫氏私信）。「イカリガケ」では寒天の原料となるトリノアシ（褐藻類）が採れた。伊藤（2003）には、恋路ヶ浜の東部にはカエル岩、その沖にはオオガカリがある。アシカ島の南には「権兵衛」がある。アカガメ（赤亀）は東側を向いた亀の形をしており、赤色の岩石に見えることからこの名前がある。アカガメの東側が頭部にあたる。ウシノクビ（牛の首）は、伊良湖防衛衛所跡の平坦面から海側に突き出た岩塊が、牛の頭に見えることによる（写真6）。柳田（1902）では「山は海に迫りて、奇巖怪石数限も無し。其形によそえて牛の首といふ」とある。牛の首の側面に割れ目に沿って新たな海食洞が形成されている穴がハトアナである（伊藤，2003）。粕谷（1953）ではオオジマ（沖の石門）、陸側の海食洞のある大岩が石門となっている。建設省地理調査所の5万分の1の地



写真5 a. トクジマ，  
b. ナワバリ， c. アシ  
カジマ



写真6 a. アカガメ，  
b. ウシノクビ

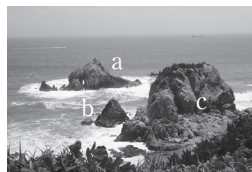


写真7 a. オオジマ，  
b. タテイワ， c. オカ  
ノセキモン

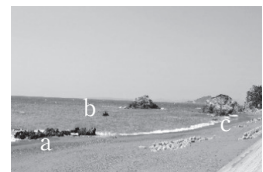


写真8 a. グサ， b. ネ  
ボソ， c. カサダイ

図(酒井・林, 1956)には、日出の石門が沖の石門、陸(おか)の石門に分けて記入されている(写真7)。夏目可敬の『三河名所図会』には、オオジマの別称として竜宮島がある。日出海岸の東側には、ネボソ、ウラバ、

カサダイがある(写真8)。ネボソ(根細)は、水面から水底に向かい岩の幅が細くなっている。粕谷(1953)は「三つじま」の沖に「十一」と書いた岩礁を記している。粕谷(1991)では、「拾壹島」は715(霊亀元)年の三河大地

表3 和地一色海岸・和地海岸の岩礁名の対比

杉山(1747)	石川(1967)	本論文
みさご岩	不明	ビシャゴ
大岩	不明	———
釣岩	釣岩	ツリイワ
かわご岩	かわご岩	カーゴ
汐見岩	汐見岩	フシミ
立岩	立岩	タテイワ
赤岩	不明	チョボ、タカチョボ
姥岩	姥岩	オパー



図4 和地一色海岸の岩礁分布



写真9 マルイワ

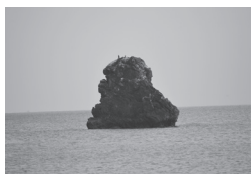


写真10 タテイワ



写真11 ウノクソ



写真12 ネプト

### (3) 和地一色海岸・和地海岸

和地一色海岸・和地海岸は、渥美半島の中でも山脚部分が広範囲に南に張り出した対置海岸である。和地の地名は、「ウワヂ（上地）、或いは曲がりくねった山裾の地のワヂ（輪地）」に由来する（葉山, 2008）。石川（1967）は、和地海岸の岩礁名を田原藩の『御領内池数并名之有之岩基外古代より申伝在之場所等之書付』（杉山, 1747）と漁師であった間瀬力蔵氏からの聞き取りによりまとめた。杉山（1747）と石川（1967）の岩礁名を基に、本論文で使用した岩礁名を対比した（表3）。

川尻川河口西端までの和地一色海岸は、秩父帯のチャート層に不整合に福江層がのっている。西側の海岸には、マルイワ（円岩、写真9）、タテイワ（立岩、写真10）、ブンタ（文太）、ウノクソ（鵜ノ糞、写真11）、ビシャゴ、ダツ、ネプト（写真12）がある。1960年5月22日に起きたチリ地震の時は、タテイワまで潮が引いたことが確認されている（間瀬定雄氏私信）。タチイワ（立岩）は、和地町立岩の多墓山の南麓にあり（図5）、和地一色海岸のタテイワとは同名異岩である。その真南にはカジカキがある。ビシャゴは、杉山(1747)の「みさご岩」にあたる。

図5には、和地海岸の川尻川河口沖から西和地のテント場（昭和22～23年までは村芝居が行われた）南の岩礁分布図である。



図5 和地海岸（川尻川河口～西和地テント場南）の岩礁分布





写真13 a. オオイワ, b. クロイソ, c. ヒジキ



写真14 a. マナイタ, b. ニシマナイタ



写真15 スズメ



写真16 ナカカーゴ、オキカーゴなど

川尻川河口の東の沿岸はオオイワなどからなる岩礁地帯がはじまり、その沖にはクロイソ、ヒジキがある(写真13)。ヨゴスケ(与五助)は、明治時代の釣り名人にちなむ名前である。チョボ、タカチョボは、杉山(1747)の御領分境とされた「赤岩」にあたる。サザエ(栄螺)はサザエが多く生息していた岩礁である。イマイチジロは100年程前のアワビ取りの名人(今一じろ)からきている。じろ(しろ)は、キノコ類が密集して生える「シロ」と同じ意味で使われ、サザエが多く採れる秘密の場であった。フシミ(伏見)は、杉山(1747)の「汐見岩」にあたり、大きな岩の集まりで、篠島などの漁師は「平島」と呼んだ。石川(1967)では、沖合約300mに3個あり、満潮時には全部水没する。タカブシミ(陸伏見)は、水流が早い(伏みず)ので船の舵がよく当たったことによる。ナワガキは、よく縄がかかる岩礁ということで呼び名「縄掛かり」が訛り「ナワガキ」となった。マナイタ(組板)は、まな板のような平らな形の岩であり、西側にあるものがニシマナイタ(西組板)である(写真14)。アシカ(海驢)は、昭和30年代頃までしばしばアシカが目撃された岩礁である。スズメ(雀)は、岩の割れ目にスズメが巣を作ったことによる(写真15)。汀線付近にあり、海浜より約6mの高さがあった(石川, 1967)。タカカーゴ(たか籠)は、杉山(1747)の「かわご岩」にあたり、沖合50mに位置し、満潮時に約2mの高さまで露出した(石川, 1967)。その南側に、ナカカーゴ、オキカーゴがある。「タカ」は陸側を意味し、カーゴは籠の訛りである。岩

礁が籠のように囲んでいることからきている(写真16)。イナブラは、刈り取った稲を積み上げた形(稲むら)に似ていることによる。ゼニイソ(銭磯)は平らな岩、ツリトリ(釣りとり)は、釣りの仕掛けをよく引っかけた岩であることから、名前が付けられた。

和地海岸東部(西和地テント場南〜鮎川河口約200m東)の岩礁分布図は、青山貞一、間瀬定雄、河合市雄の3氏への聞き取りと現地調査に基づき作成した(図6)。

カメイワ(亀岩)は、沖から見ると西を向くカメの形をしている(写真17)。モチイワ(餅岩)では、昭和30年頃まで津島神社祇園祭(津島祭)の時に藁小屋を作って焼き、餅投げをする風習が残っていた(写真18)。オオシマ(大島)は、あまり大きな岩ではないのにこの名前が付いている。ネボソ(根細)は、岩の下側が細くなっていることによる。スギタオシは、スギという人がタコ採りに行き八日目に亡くなったとの伝説が残っている。アラメイソ(荒布磯)は、アラメが多く付着することによる。トーニュードウは、トーサ(人名)が多くタコを採った場所である。伊藤(2003)ではニュードウである。オキサガは、沖に潮が下がる位置にある。オオガカリ(大掛り)は、この暗礁にかからないように地引き網をかけた。ガタギは、岩の上ののりとガタガタ動くことによる。オオアカミ(大赤見)は、赤みを帯びた暗礁である。フタツイソ(二つ磯)は、杉山(1747)では浜辺にあるとされていたが、今は沖合にある。ワレイワ(割れ岩)は、汀線付近にあり岩の中央部分が割れている(写真19)。弥蔵さんが釣りをしていた岩

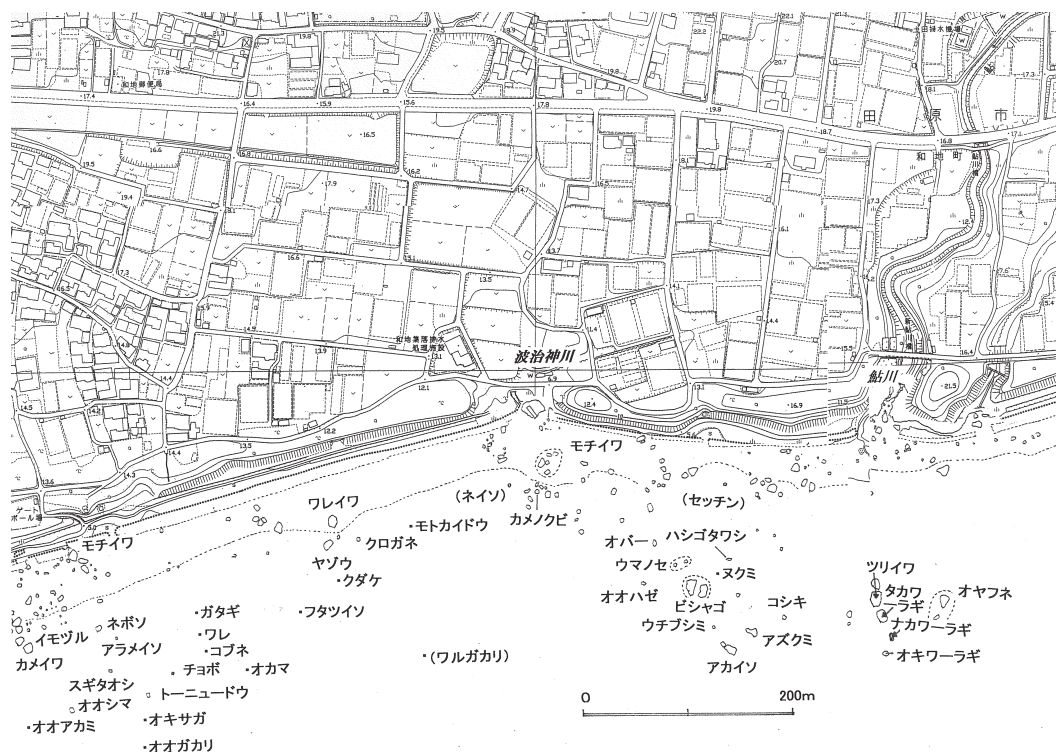


図6 和地海岸東部（西和地テント場～鮎川河口東）の岩礁分布



写真17 a. カメイワ



写真18 モチイワ

写真19 a. フレイワ,  
b. ヤゾウ

写真20 ビシャゴ

なのでヤゾウと呼ばれた。ワルガカリ（悪掛り）は、地引き網をかけると真ん中にあり邪魔のため、元禄年間にイカダを組んで破壊された。モトカイドウ（元街道）は今では汀線付近にあるが、伊勢街道が通っていた辺りであることから名前がついた。ネイソ（根磯）は、元禄年間に破壊された。カメノクビ（亀の首）は、カメが首を持ち上げた形をしている。波治神川河口にあるモチイワ（餅岩）は、そこから餅投げが行われた。その西側の浜は、和地の網場となっていた（伊藤, 2003）。オバー（姥岩）は、杉山（1747）では浜辺の網場にあっ

たと記されているが、石川（1967）では沖合20m付近にあるとされ、現在はさらに沖合に位置している。ウマノセ（馬背）は、ウマの背のような形の岩である。セツチンは、戦後直後にダイナマイトで破壊された。スクミは、岩の真ん中に直径1m程の風呂のような穴があいている。その南西には二つの岩礁からなるビシャゴ（写真20）がある。ツリイワ（釣岩）は沖合100mに位置し、海面上約3mの高さに露出する（石川, 1967）。

#### (4) 土田海岸

表4 土田海岸の岩礁名の対比

杉山 (1747)	石川 (1967)	本論文
六束岩	六束岩	ロクソクイワ
汐干岩	汐干岩	ショボシ
黒岩	黒岩	クロイワ
雀岩	すずめ岩	スズメ
梅岩 (又びしゃこ岩)	梅岩 (又びしゃこ岩)	ウメイ (ウメー)
二ッ磯岩	二っ岩	フタツイワ

土田海岸は、和地町鮎川の東～土田農村公園沖（西部）と和地町土田農村公園沖～越戸町長尾川沖（東部）に分けて記述する。本論文の岩礁名は杉山（1747）と石川（1969）の名前を対比した（表4）。土田海岸西部と東部の岩礁分布図は、青山貞一、間瀬定雄、河合市雄の各氏からの聞き取りと現地調査を踏まえまとめたものである（図7、8）。

鮎川河口の東側は「タカスナ」と呼ばれて

いる浜が広がっている。そこから始まる土田海岸西部の岩礁については、以下のとおりである。

ロクソクイワ（六束岩）は、和地と小塩津境の沖約300mにある。稲わらで作った綱（一卷200m）を4分の1にしたものが一束（50m）とされた。六束の沖にある島であることから、この名前が付いた。ショボシは、沖合300mにあり（石川，1967）、安政地震（1854



図7 土田海岸西部の岩礁分布





写真21 a.ナガイワ、  
b.カッター



写真22 フタツイワ



写真23 サシカサイワ



写真24 スズメイワ

年) 発生時には潮がショボシまで引き白砂となったことが、田原領和地村の田中孫六郎の『五月雨噺』に記録として残っている(清田, 2003)。岩礁名では「しょほし」とある。伊藤(2003)では、タナバタ(タナモト)はタナボタとある。ナガイワは、縦に長いところから長岩と呼ばれていた(写真21)。フタツイワ(二ッ岩)は、岩が二つ並んでいる(写真22)。石川(1967)では干潮汀線付近にあり、西側の岩が大きいと記している。オカメ(お亀)はカメの甲羅に似ていることからオカメと呼ばれた。ウメイ(ウメー)は、杉山(1747)の梅岩で、石川(1967)では干潮時に1m海面上に出ていたが、昭和50年初めに海が荒れている時にタグボートが台船を引っ張りきれ

ずにウメイに台船を当てたために、欠け落ちて海面下となったとある。ワルウメ(割梅)は、岩礁に東西の割れ目があることによる。サシカサイワ(差し傘岩)は、垂直で上が開いていて傘をさしたような形をしていたことから名付けられた。以前は夏になると子供たちが岩からよく飛び込みをしたが、現在では岩が割れ落ちて元の形をとどめていない(写真23)。オオマナイタ(大組板)は、まな板のように岩の上が平らになっているところから名付けられ、大潮の干潮時は岩の上に船を上げてワカメを採った。ウノトリイワ(鵜の採り岩)は、ウがよく止まるので、昭和20年頃まで鳥モチを使って鵜飼用に捕獲する場であった。カミナリイワ(雷鳴り岩)は、昔落



図8 土田海岸東部の岩礁分布



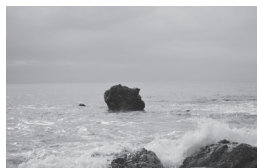


写真25 フグツリイワ



写真26 a. シオミズイワ, b. タタミイワ

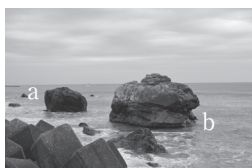


写真27 a. コスズメイワ, b. オオスズメイワ



写真28 トンビイワ

雷があり岩が二つに割れたところから名付けられた。スズメイワ（雀岩）は、切り干し芋をねらってスズメがよく群がっていたことによる（写真24）。石川（1967）では「干潮汀線付近にあり、浜辺からの高さが約6 mあった」とある。

土田海岸東部の岩礁については、以下のとおりである。

フグツリイワ（フグ釣り岩）は、この岩からフグを釣った（写真25）。アカイソ（赤磯）は、船付けで船足を止めた船が、アカ磯の所まで来た波の状態が静かな時（アカ）を見て、船を着けることからアカ磯と呼ばれた。フナツケ（船付）は、船を着ける時に、この磯の近くで船足を止めることに使ったことによる。タコイワ（凧岩）は、凧揚げをする岩に使われた。キリボシイワ（切り干し岩）は、戦時中芋切り干し作りが盛んに行われ、その上が干場となったことによっている。タタミイワ（畳岩）は、チャート層が畳を積み重ねたような形をしている。クロイワ（黒岩）は、他の岩に比べ黒い色をしている。シオミズイワ（塩水岩）は、岩の上に窪みがあり、いつも海水が溜まっているところから名付けられた（写真26）。陸続きの時は、溜まっている塩水を利用して野菜を洗っていた（モミ菜）。現在では砂浜がなくなり岩に上ることができなくなった。コスズメイワ（子雀岩）・オオスズメイワ（大雀岩）は、岩の窪みを利用してスズメが巣作りをしていたことからスズメイワ（雀岩）と呼ばれるようになった（写真27）。今では巣作りをするスズメは見られない。オオスズメイワは、昭和30年代初め頃ま

で、砂浜で繋がっていて岩にも登ることができ、秋葉神社の御神事（12月16日）には餅投げがあった。その後、砂浜の消失と共に岩に登ることができなくなったため、餅投げは集落センターで行うようになった。アカミイソ（赤見磯）は、海中が赤く見えることからアカミイソと呼ばれた。石川（1967）の黒岩にあたり、沖合150mの海面上に約3 mでている。トンビイワ（鳶岩）は、地引き網から外れた魚をねらいトンビがよく止まったことから、鳶岩と呼ばれるようになった（写真28）。クダケは、岩礁が波を砕くように見えることから名付けられた。

#### （5）越戸海岸

越戸海岸の岩礁記録は、杉山（1747）が最初であり、それを基に地元渡会優高氏から聞き取りをした石川（1967）と本論文の名前を対比してある（表5）。今回、杉山の岩礁名を中心に、地元の伊藤正明、河合正泰の両氏からの聞き取りにより岩礁の位置を確認したものが図9である。石川（1967）は、「杉山とは丹波神岩、穴あき岩、東神岩、大岩及び、海岸線にはほとんど変化がなかった」と記している。また、1747（延享4）年の海岸線は1963年4月測量より防波堤の南端にある三ッ岩を頂点に張り出していたと推定している。この他、対比表に入れてなかった愛知県編（1914）では、赤羽根村（越戸、若見、高松、赤羽根の大字からなる明治22年から昭和33年にあった自治体）には、金床、ヌンメリ、コムソラ、沖ノ兵庫、陸ノ兵庫ほか無名礁が数個あることを述べている。

表5 越戸海岸の岩礁名の対比

杉山 (1747)	石川 (1967)	本論文
当り物岩	当り物岩	アタリモノイワ
六束岩	六束岩	ロク (クソク)
わろう岩	不明	ワロウ
三ッ懸り岩	三ッ懸り岩	不明
小わろう岩	不明	コワロウ
横岩	横岩	不明
立ゑぼし岩	立えぼし岩	タテエボシ
兵庫岩	兵庫岩	オカヒョウゴとオキヒョウゴ
菰僧岩	こもそう岩	コモソウ
三ツ岩	三つ岩	ミツイワ
平岩	平岩	ヒライワ
丹波神岩	丹波神岩	タンバーサン
はなず岩	鼻づら岩	ハナヅラ
穴あき岩	穴あき岩	アナアキ
いぬもち岩	不明	不明
源十磯岩	源重磯岩	ゲンジュウイソ
かき磯岩	かき磯岩	カキイソイワ
東神岩	東神岩	トウジンイワ
大岩	大岩	ワカミオオイワ



図9 越戸海岸の岩礁分布



写真29 タンバーサン

写真30 a. タテエボシ,  
b. ヒライワ写真31 a. ミツイワ,  
b. コモソウ, c. ヒョウゴ写真32 a. ワカミオオ  
イワ, b. ツナカケ

オカヒライソは、中潮、大潮に現れる。タンバーサン（丹波神岩）は、越戸防波堤西約50mにあり（石川，1967）（写真29）、11月15日の祭りには越戸神社の東50mに奉られた山の神の魔よけの札や人形を焼く祭事があった。ヒライワ（平岩）は越戸防波堤西約40mにある（石川，1967）。タテエボシ（立烏帽子）は、越戸防波堤西南西約40mにあり（石川，1967）、海底の岩礁地形からリュウグウの別名がある（写真30）。ヒョウゴ（兵庫）は、オカヒョウゴ（陸兵庫）・オキヒョウゴ（沖兵庫）からなる。コモソウ（孤僧）は虚

無僧のような形をしており、兵庫岩の東にあり、大潮干潮時に露出する（石川，1967）。ミツイワ（三ッ岩）は越戸防波堤先端の岩で3個ある（石川，1967）（写真31）。チョッポリは、ハシゴ（梯子）の東側の隙間にある。ハナヅラ（鼻づら岩）は、人の鼻形をしており、沖合50m付近にある（石川，1967）。アタリモノイワ（当り物岩）は、長さ4m、幅2mあり、地引き網をする時に真ん中に位置するため、邪魔な暗礁である。アナアキは杉山（1747）の「穴あき岩」で、昭和41年護岸工事により護岸の一部となった。ゲンジウ

表6 若見海岸の岩礁名の対比

杉山（1747）	石川（1967）	本論文
大屋岩	大尾岩	オオヤ
きやうにふ岩	不明	不明
長ヶ岩	不明	不明
袋岩	袋岩	不明
三束岩	三束岩	オキサンゾク、ナカサンゾク、オカサンゾク
二束岩	二束岩	ニソク
白岩	不明	不明
ゆふか岩	ゆふが岩	ユウガイ
天白岩	天白岩	テンパク
牛岩	牛岩	不明
こ路び岩	ころび岩	コロビイワ
赤岩	赤岩	アカイワ
猿橋岩	不明	不明

イソは、杉山（1747）では「源十磯岩」、石川（1967）では「源重磯岩」、沖合30m付近（水没）とある。カキイソイワ（牡蠣磯岩）は、沖合50m付近にあるが、水没している（石川、1967）。トウジンイワ（東神岩）は、杉山（1747）では「浜辺にあり、岩の上には松が1本生えていた」とある。1965年の災害護岸工事を取り壊され（石川、1967）、護岸と一体化した。ワカミオオイワ（若見大岩）は、中等潮位汀線付近で（石川、1967）、越戸海岸の東、庄五郎川河口沖にある（写真32）。

#### (6) 若見海岸

若見海岸の岩礁は、杉山（1747）、地元の松下豊氏の聞き取りでまとめた石川（1967）と対比した（表6）。岩石海岸と砂浜海岸に区別されるが、石川（1967）では、杉山（1747）の時期のご路び岩、赤岩、及び袋岩、天白岩、牛岩より30m程度侵食されており、和地海岸、越戸海岸に比べ侵食は大きかったとしている。岩礁分布図は、若見町の伊藤博文、青木茂弘の両氏、越戸町の林徳太郎氏から聞き取った資料を基に作成した（図10）。

アカイワ（赤岩）はワカミオオイワの南東

にある。コロビイワは、石川（1967）では沖合10mにあり、干潮に渡ることできたとある。若戸保育園の南西の沢を地元では天白と呼び、その沖合のよく網が引っ掛かった暗礁がテンパク（天白）と呼ばれている。牛岩は沖合50m付近にあり、大潮の時には露出したが、破壊されたと報告している（石川、1967）。ニソクは、沖合120mにあった暗礁で爆破されたとあるが（石川、1967）、今はギボの沖にあり頭がでることもある。杉山（1747）と石川（1967）の三束岩は、本論文のオキサソク、ナカサソク、オカサソクの3つの岩礁をまとめて呼んだ名前であった。オオヤ（大屋）は、若見と池尻間の沖合250m付近にある（石川、1967）。フクロイワは、石川（1967）では沖合50m付近にあり、大潮干潮時に時々見えるとあるが、今回は確認できなかった。石川（1967）では、「大尾岩」の西約150mにあり、暗礁としている。

#### (7) 高松一色海岸

田原市高松町一色の「ロングビーチ北」の信号を海側に下ると「一色の磯」として知られる岩礁海岸となり、オオイソをはじめ、秩



図10 若見海岸の岩礁分布





図11 高松一色海岸の岩礁分布



写真33 a. ヒガシダイミョウジン, b. オオイソ



写真34 a. ニシダイミョウジン, b. ビョウブ

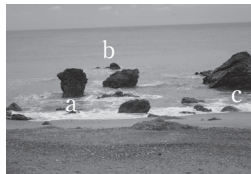


写真35 a. タチイワ, b. イナムラ, c. ミツイワ



写真36 a. クジラ

父帯の岩石からなるチャートの巨岩が散在している。東側の浜は、北側に海食崖がせまり、ビーチカスプが発達し、砂と円礫からなる浜となっている。西の赤羽根海岸側は、砂浜が弧を描きながら赤羽根港に伸びている。この海岸は、太平洋ロングビーチの愛称が使われているが、古くは「ジャワ」の名前が存在していた(松岡編著, 2016)。

渥美半島全圖(郷土地理研究会, 1927)には、一色辯天と書いた岩礁が書かれている。説明には、「一色の大磯(一色ノ磯)には無数の奇岩とともに約200m沖には高さ20m、東西60m、南北40m、頂上が二峰、市杵島姫命の石像がある」とある。一色の大磯の基盤岩の突出は、断層のずれによるものと推定されてい

る(石井, 1927)。石川(1967)では、「一色の大岩」は沖合100～150m付近の海の中にあるとし、杉山(1747)の状況とは変わっていないと述べている。

今回は大羽隆、石川正博、伊藤仁、大羽清一、大羽康利、渡邊昌廣の各氏からの聞き取りにより岩礁分布図を作成した(図11)。

オオイソ(大磯)は、弁天様が岩の上に祀られている大岩である。赤羽根小学校校歌(鈴木三夫作詞、伊藤武雄作曲, 1957年)にはオオイソが「くろがねの岩」として歌詞に登場する。「弁天様」という祭りが毎年4月に行われ、餅投げもされる(写真33)。ニシダイミョウジン(西大明神)は、一色の大磯の西側にあるチャートの大岩である(写真34)。

ヒガシダイミョウジン（東大明神）の南東にはタチイワ、ヒコベイ（彦兵衛）、イナムラ（稲むら）、ミツイワ（三ッ岩）がある（写真35）。ニシダイミョウジンの西側には大小の岩礁があり、大潮の干潮時に出現するクジラもその一つである（写真36）。

## 謝 辞

本報告にあたり、岩礁に関する情報と調査に協力していただいた田原市在住の間瀬定雄（和地町）、河合市雄（和地町）、河合正泰（越戸町）、天野敏規（福江町）、青木茂弘（若見町）、青山貞一（和地町）、藤江昌代（浦町）、葉山茂生（和地町）、林徳太郎（越戸町）、石川正博（高松町）、伊藤仁（高松町）、伊藤正明（越戸町）、伊藤博文（若見町）、糟谷研三（伊良湖町）、粕谷政行（伊良湖町）、大羽隆（高松町）、大羽清一（高松町）、大羽康利（高松町）、斉藤信夫（日出町）、齋藤勇治（日出町）、渡邊昌廣（大草町）の各氏にお礼申し上げます。

## 参考文献

- 愛知県（1908）2万分の1の地図 愛知県参河全図。菊花堂。
- 愛知県編（1914）愛知縣史第一編地理 第一章 地文。1—28, 愛知県史上巻, 国書刊行会, 東京。
- 渥美郷土資料館編（1988）特別展 奥郡の村絵図。渥美町郷土資料館, 渥美。
- 地理調査所（1947）2万5千分の1地形図「伊良湖岬」。
- 藤田佳久（1993）あとがき—その後の渥美半島の地域変化にも言及して—, 405—409. 渥美半島の文化史. 愛知大学総合郷土研究所研究叢書Ⅷ, 名著出版。
- 巖谷散人編（1741）懷玉三河州地理図監。
- 郷土地理研究会（1927）渥美半島全圖。一誠社, 名古屋。
- 国土地理院（1997）5万分の1地形図「伊良湖岬」。
- 葉山茂生（2008）堀切から和地海岸。たはらの海辺の博物誌, 80-81. 田原市, 愛知県。
- 市川東谿（1837）参河國, 東壁堂。
- 石井清彦（1927）7万5千分の1地質図幅「伊良湖岬」。商工省地質調査所, 東京。
- 石川 定（1967）S42.5 愛知県赤羽根漁港水理模型実験報告 中間協議会資料。愛知県, 365p.（手刷）
- 伊良湖自治会（2006）伊良湖誌。伊良湖自治会, 田原市。
- 伊藤良吉（2003）渥美半島の海と山。愛知県史民俗調査報告書6 渥美・東三河, 12-67。
- 粕谷魯一（1953）伊良湖崎の今昔。自費出版。
- 粕谷哲朗編（1990a）伊良湖のむかし, 初版。自費出版。
- 粕谷哲朗編（1990b）伊良湖のむかし, 改訂版。自費出版。
- 粕谷哲朗編（1991）伊良湖のむかし, 再改訂版。自費出版。
- 粕谷哲朗編（1992）伊良湖のむかし, 増版。自費出版。
- 清田 治（2003）渥美半島における嘉永東海地震の実情—現存する記録から。研究紀要, (7), 29-60。
- 栗原光政（1955）渥美半島の漁村の地理学的研究—特に表浜について—。愛知大学総合郷土研究紀要, 第一輯, 11-26。
- 松岡敬二編著（2016）古地図で楽しむ三河。風媒社, 名古屋。
- 中島 礼・堀 常東・宮崎一博・西岡芳晴（2010）地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）伊良湖岬地域の地質。産業技術総合研究所, 地質調査総合センター, つくば市
- 中島 礼・堀 常東・宮崎一博・西岡芳晴（2008）地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）豊橋及び田原地域の地質。産業技術総合研究所, 地質調査総合センター, つくば市。
- 小田切春江編輯（1877）尾三両国図。栗田慶雲堂。
- 岡田啓編（1837）三河国全図。尾張。
- 太田正公ほか（1889）尾参實測圖。愛知県庶務課地理係。
- 齋藤員象訂・小田切多藝雄補（1879）三河国全図。愛知県蔵版。
- 酒井栄吾（1956）三河湾の地形説明。三河湾自然公園調査報告書, 4-11, 愛知県。

酒井栄吾・林 唯一（1956）三河湾の地学特殊景観.

三河湾自然公園調査報告書，36-41，愛知県.

杉山半八郎（1747）御領池数兼名之有岩其外古代より申伝在之場所等之書付．田原藩郷村奉行兼田原町奉行.

辻村太郎（1929）日本地形誌．古今書院，東京.

柳田国男（1902）游海島記．柳田國男全集2（1989），筑摩書房，東京.

安田 健（1987）江戸諸国産物帳 丹羽正伯の人と仕事．晶文社，東京.

